

家持と書持の贈報再論

— 異論を超えて真実へ —

The Remonograph on the Exchanged Poems between Yakamochi and Fumimochi: Seeking the Truth Beyond the Different Monographs

鈴木武晴

SUZUKI Takeharu

(1)

万葉集の巻十七に収録されている大伴家持と大伴書持という兄弟の心の交流を語り告げる歌については、かつて論文を公にした。近時この論について異論が提出されたので、再度ていねいに考察して異論に答え、作品の本質と文学性についていっそう深く浮き彫りにした。

一、序

万葉集の巻十七には、大伴氏の家持やかもちと書持かきもちという兄弟の心の交流

を語り告げる贈報歌群が収録されている。時は天平十三(七四二)年の四月の二日と三日。題詞と左注の原文を書き下し文、歌詠の原文を読み下し文で示せば、次のとおり。

ほととぎす
霍公鳥を詠む歌二首

なちはなとこはな
橘は常花にもがほととぎす住むと来鳴かば聞かぬ日無けむ

(三九〇九番歌)

たま
玉に貫く棟を家に植ゑたらば山ほととぎす離れず来むかも (三一〇番歌)

右は、四月の二日に、大伴宿禰書持、奈良の宅いへより兄家持

に贈る。

橙橘初めて咲き、霍鳥翻り嚶く。この時候に对ひ、あに志を暢べざらめや。よりて、三首の短歌を作り、もちて鬱結の緒を散らさまくのみ。

あしひきの山辺に居ればほととぎす木の間立ち潜き鳴かぬ日は無し(三九一一番歌)

ほととぎす何の心ぞ橘の玉貫く月し来鳴き響むる(三九一二番歌)

ほととぎす棟の枝に行きて居ば花は散らむな玉と見るまで(三九一三番歌)

右は、四月の三日に、内舎人大伴宿禰家持、久邇の京より弟書持に報へ送る。

筆者がこの贈報歌群について、やまと歌の手法の検討に基づいて詳細な論文「家持と書持の贈報」を発表したのが、一九八八(昭和六十三)年の一月のこと。それは、本稿執筆の現時点二〇一六(平成二十八)年十月二日から二十八年ほど前のことである。

この論文は、万葉集研究史上、右掲歌群について本格的に研究した最初の論文と客観的に位置づけられる。

この九年後の一九九七(平成九)年九月に、異を唱える論が提出された。日中比較文学の観点からの鉄野昌弘「詠物歌の方法」である。そして、二十八年後の二〇一六年(平成二十八)年五月の松田聡「家持と書持の贈答―「橘の玉貫く月」をめぐる―」である。

これらの異論をよく読んでみた。本稿の論述を展開してゆくなか

で明らかになるように、鉄野論文等はやまと歌の読みが表面的であり、かつ不十分である。また、松田論文も歌の読解に問題がある。

筆者の論と後の論の大きな違いは、家持と書持の贈報歌群の歌に、寓意を読みとる筆者の立場と表面の読みにとどまる異論との違い、家持の妻坂上大嬢の影を認める筆者の立場とそれを認めない異論の立場の違いである。

考察対象の作品をめぐる、解釈や捉え方などが異なる場合は、その作品に用いられている言葉や表現を、他の同様の例を参照して丁寧にかつ厳密に検討考察して、客観的に妥当性の判断を行うしかなければならぬ。根拠としての事例を明示することが根本であり、根拠としての事例を示さない恣意性があったてはならないこと、言うまでもない。

筆者の前掲論文では、根拠としての例を掲げて考察した。本稿では、異論の問題点と非妥当性を具体的に指摘しつつ、さらなる有効事例を追加して、贈報歌群の高い文芸性をいっそう強く照らし出したいと思う。

二、「奈良の宅」考

前述のように、家持と書持の贈報歌群の歌に寓意を読みとるか否か、家持の妻坂上大嬢の影を認めるか否かの大きな問題の考察から入ってゆこう。

寓意を読み取り、家持の妻坂上大嬢の影を認める筆者にとって看過ごすことのできない重要な言葉は、前論でも触れた、書持歌と家

持歌の左注に記されている「奈良の宅」という言葉である。

この「奈良の宅」は奈良の佐保の地に存在した大伴氏の邸宅で、家持の報送歌の左注に示されている、家持のいた「久邇の京」(天平十二(七四〇)年十二月から天平十六(七四四)年二月までの聖武天皇の都で京都府南部の木津川市にあった)と対置して用いられている。

このように、「奈良の宅」と「久邇の京」とが対応して用いられている例は、当面歌群の他に三例。次に掲げるように、いずれも家持とその妻坂上大嬢に関する歌例である。

1、久邇の京に在りて、奈良の宅に留まれる坂上大嬢を思ひて、大伴宿禰家持が作る歌一首

一重山へなれるものを月夜よみ門に出で立ち妹か待つらむ(巻四・七六五番歌)

2、大伴家持、坂上大嬢に贈る歌一首

春霞たなびく山のへなれば妹に逢はずて月ぞ経にける(巻八・一四六四番歌)

右は、久邇の京より奈良の宅に贈る。

3、大伴宿禰家持、久邇の京より、奈良の宅に留まれる坂上大嬢に贈る歌一首

あしひきの山辺に居りて秋風の日異に吹けば妹をしぞ思ふ(巻八・一六三二番歌)

この1〜3の歌例と当面の家持と書持の贈報歌群は、ほぼ同時期、天平十三年の春から秋にかけて詠まれたものと見られ、有機的に密接にかかわると考えられる。年代的順序について考察しよう。

1の巻四・七六五番歌の題詞は、「久邇の京に在りて」「坂上大嬢を思ひて」など、他の例の題詞よりも丁寧に記載されている。歌の「一重山へなれるものを」の認識は、家持が久邇京に移り住んでまもない頃の認識と覚しい。また、この歌の下の句「月夜よみ門に出で立ち妹か待つらむ」は、かつて坂上大嬢が家持に贈った

春日山霞たなびき心ぐく照れる月夜にひとりかも寝む(巻四・七三五番歌)

や、それに和した家持の

月夜には門に出で立ち夕占問ひ足占をぞせし行かまくを欲り(巻四・七三六番歌)

を踏まえての表現である。

以上のことから巻四・七六五番歌は、天平十三(七四一)年の春の歌かと推察される。

この七六五番歌の「一重山へなれるものを」と、2に掲げた巻八・一四六四番歌の「春霞たなびく山のへなれば」の表現は密接にかかわる。一四六四番歌も春の歌であり、七六五番歌と同じ時期の歌かと思われる。

当面の家持と書持の贈報歌群は天平十三年の四月の二日と三日の

歌で、橘や棟、ほととぎすを詠んで夏の歌であること明らかである。そして、3に掲げた巻八・一六三三番歌は「秋風の日に異に吹けば」とあり、秋の歌である。

以上のことから、「奈良の宅」と「久邇の京」の語を対置する歌は、天平十三年の春から秋にかけて、まず、巻四・七六五番歌、次に巻八・一四六四番歌、そして当面の家持と書持の巻十七・三九〇九番歌、三九一三番歌、さらに巻八・一六三三番歌という順で形成されたものと思われる。

巻八・一四六四番歌の左注に「右は、久邇の京より奈良の宅に贈る。」とあることと、当面の贈報歌群の書持の二首の左注の「右は、四月の二日に、大伴宿禰書持、奈良の宅より兄家持に贈る。」、家持の三首の左注の「右は、四月の三日に、内舍人大伴宿禰家持、久邇の京より弟書持に報へ送る。」の記載のしかたが類似していることや、贈報歌群の家持の第一首三九一三番歌の「あしひきの山辺に居れば」と類同する表現が巻八・一六三三番歌に「あしひきの山辺に居りて」と見られることは偶然ではなく、歌詠形成の密接なかわわりを示していると言える。この年代的順序の推定に誤りがあっても、当面歌群を含む四つの作品が有機的に密接にかかわっていることは動かない。

この四つの歌作品の、「久邇の京」に対置する「奈良の宅」は同じ宅をさすものと見られ、奈良の佐保の地の大伴氏の邸宅をさすと考えられる。

1〜3の三例の「奈良の宅」を、奈良の坂上の里にあった、坂上大嬢の母坂上郎女の家とするむきもあるけれども、大伴氏の邸宅をさすと見るべきであろう。なぜなら、1と3の例に「奈良の宅に留

まれる坂上大嬢」とあり、この「留まれる」は、次の「留女」の例を参照すれば明らかのように、大伴家の主の家持が不在の間、その大伴氏の邸宅に留まって留守をまもっているという意味であるからである。

・京師より贈来する歌一首

山吹の花取り持ちてつれもなく離れにし妹を偲ひつるかも（巻十九・四一八四番歌）

右は、四月の五日に留女の女郎より送れるぞ。

・京人に贈る歌二首

妹に似る草と見しより我が標めし野辺の山吹誰か手折りし（巻十九・四一九七番歌）

つれもなく離れにしものと人は言へど逢はぬ日まねみ思ひぞ我がする（四一九八番歌）

右は、留女の女郎に贈らむために、家婦に詠へられて作る。女郎はすなはち大伴家持が妹。

この二つの歌は有機的にかかわる歌で、越中国守として越中に赴任していた大伴家持のもとに奈良から妻坂上大嬢が出向いた時に、大伴氏の主の家持と家刀自（四一九七〜八番歌の左注には「家婦」とある）である坂上大嬢の留守の間、奈良の大伴氏の家に留まって守る女性（ここでは家持の妹をさす）を「留女の女郎」と表しているのである。

このことから、先の例の「奈良の宅に留まれる坂上大嬢」も、家

持が久邇の京に赴任している時に「奈良の相伴氏の邸宅に留まり、留守をまもっている妻坂上大嬢」の意に解すべきである。坂上大嬢は、家持と結婚する前はむろん母坂上郎女の「坂上家」に起居していたけれども（後掲巻三・四〇三番歌、四〇八番歌など参照）、結婚後は、奈良の佐保の地にあった相伴氏の邸宅を主たる生活の場としていたであろう。特に、家の主の夫家持が他国に赴任していた時には、相伴氏の「奈良の宅」に留守を守っていたのである。

このように、「奈良の宅」と「坂上家」では表わす所と用法が明確に異なっているのである。後に、家持が越中国守として越中国に赴任していた時に、妻坂上大嬢が留守を守っている奈良の家を「京の家」と家持が記していることも重要な例として参照される（後掲巻十八・四一〇一〜四一〇五番歌題詞）。

そうしてみると、相伴氏の本拠の邸宅に、家持の留守を守る妻坂上大嬢と、家持の弟書持がともに住んでいたことになる。坂上大嬢と書持は年齢的にも近かったと思われ、二人の間で、心かよいあう会話がなされたであろう。久邇京の家持を案ずる気持ちは共通であり、家持を話題にしての対話もなされたであろう。家持と書持と家持の妻坂上大嬢は心通い合う関係であったであろう。以下に具述するように、こうしたことが書持と家持の贈報歌群に投影されているのである。

三、書持歌二首——「棟」の文学的手法と原文表記

「安布知」の意義——

前節の考察に基づけば、書持が左注にあえて「奈良の宅より」と書いたのは、書持自身のことによるのみならず、その家で留守を守っている家持の妻坂上大嬢の存在をも考慮したものとと言える。

このことは、書持の歌詠からもうかがえる。書持の第一首三九〇九番歌は、筆者の前掲論文「家持と書持の贈報」に指摘したように、巻三の「譬喩歌」の部に収録されている、結婚以前に家持が坂上大嬢に贈った恋の歌四〇八番歌と歌型・語彙が相通じ、思う対象がいつも身近にいてほしいと希求する発想も共通している。次のとおり。

大伴宿禰家持、同じき坂上家の大嬢に贈る歌一首

なでしこがその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日無けむ（巻三・四〇八番歌）

書持は家持のこの歌を踏まえて三九〇九番歌を詠み成したのである。

家持は如上の歌形成を承知していた。それは、書持の三九〇九番歌の「常花」（いつも盛りの花）をもとに、「恋緒を述ぶる歌」（巻十七・三九七八〜三九八三番歌）の長歌三九七八の妻坂上大嬢を讚美する冒頭部に、「相見れば常初花に」（顔を合わせていると、いつも盛りの初花のように初々しくて、の意）と、家持が好む「初」の

字を挿入して「常初花」の新造語を成しているからである。

書持の三九〇九番歌は久邇京の家持に奈良の宅の妻坂上大嬢を連想させるように仕立てられているのである。

鉄野昌弘先掲論の「霍公鳥への恋着を執拗に述べることで、霍公鳥以外に向き合う相手のいない自己の状況とその孤独感を語る歌」という捉え方では不十分であると言える。

そのことは第二首三九一〇番歌の考察によっていつそう明確になる。

三九一〇番歌の「玉に貫く棟」の表現については、筆者前掲論文に『新撰和歌六帖』『宝治百首』『夫木和歌抄』の歌例を参照して、「菖蒲・花橘などと共に棟の花を用ゐた」(『全釈』ゆえの表現かもしれない。)と、『全釈』の見解の可能性に言及した上で、「そう考えれば一応の解決はみる。しかし、それだけの理由とは思われない。」と記して、万葉集の「棟」の用例の考察に入った。この点について松田聡先掲論は、「棟」を「玉に貫く」例として『新撰和歌六帖』などの歌を挙げていたが、いずれも鎌倉期のものであり、上代にそのような習俗があったことを証するものとは見なしがたい。」と述べている。筆者は、「くかもしれない」と表現して『全釈』の発言の可能性に言及したまでであり、真の理由を他のことに見ている。松田発言は不当な発言と言わざるを得ない。

書持の三九一〇番歌の「棟」については、筆者前掲論文に記した窪田空穂『萬葉集評釋』の次のような発言がある。

ほととぎすを恋ふる心から、その好みそうな木として棟の木を想像したのである。その家には棟の木は無かつたところからの

想像で、想像とはいっても実際に即しているので、真実味のあるものである。

鉄野昌弘先掲論文には窪田『評釈』に言及なく同様の発言を次のように述べている。

橘よりやや花期が後まで続き、橘が散った後、霍公鳥を繋ぎ止めるものとして、橘と同様に「珠にぬく」棟を想起したのではないだろうか。そして「うゑたらば」という仮定は、喬木である棟が、本来、山野のもので、「宅」の庭などに植えるものではないことを前提としているのだろう。橘や卯の花のような普通に取り合わされる花ではとどめがたい霍公鳥が、棟でも植えてみたら、万が一でも通い続けるのではないか、というのが、あえてこの希少な取り合わせを仮想する意味であったように思われる。

松田聡先掲論はこの発言を「希少な仮想であるところに意味がある」というのはその通りであろう。」と肯定している。

しかし、以上の発言には問題があるといえる。なぜなら、「棟」の万葉集中の他の用例とその用法を十分に検討していないからである。

「棟」の用例とその用法を、原文表記までおろそかにせず研究すれば、真実がおのずと浮き彫りになるであろう。鉄野昌弘発言の「霍公鳥が、棟でも植えてみたら、万が一でも通い続けるのではないか」(傍点筆者)という消極的条件の捉え方、書持の心を興味本

意の心として捉えるその見方がいかに表面的なもので、書持のこめた真意から遠いものであるかが、わかるであろう。

筆者前掲論文に指摘したように、「棟」は万葉集中、当面の贈報歌群の二例の他に、次の二例が存する。

1 妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに（巻五・七九八番歌、山上憶良作）

2 我妹子が棟の花は散り過ぎず今咲けるごとありこせぬかも（巻十・一九七三番歌、作者未詳）

1は大伴旅人の妻の死を悼む山上憶良の「日本挽歌」（巻五・七九四〜七九九番歌）の反歌第四首で、初句をうけて「棟」には妻に「逢ふ」意が意識されており、「散りぬべし」にそれがかなわぬ意がこめられている。2は、初句をうけて「棟」に妻に「逢ふ」意がかげられていること、明らかである。

このように、「万葉集中の他の「棟」の例はいずれも妻に「逢ふ」意をこめているのである。してみると、当面の書持の三九一〇番歌の「棟」にも、妻に「逢ふ」意、具体的には家持がその妻坂上大嬢に「逢ふ」意がこめられている（筆者前掲論文）と見るのが自然である。

このことは、原文表記の検討によって、しかと裏づけられる。

書持歌以前の歌と書持歌の「棟」の原文表記を並べれば、次のとおり。

・「阿布知」（巻五・七九八番歌）
 ・「相市」（巻十・一九七三番歌）
 ・「安布知」（当面歌群の巻十七・三九一〇番歌）

書持歌の「安布知」は、憶良の七九八番歌の「阿布知」の表記を強く意識して記されたものであることがわかる。筆者先掲論文に、

「棟」に「逢ふ」の意を込めた先立つ二つの歌のうち、書持はとくに憶良歌を下地に行っているに相違ないと思う。

と記したことは、原文表記の検討によって保証されるのである。

書持歌の「安布知」の「安布」と憶良歌の「阿布知」の「阿布」の一字の違いについては、書持が万葉集で男女が「逢ふ」ということを表す一般的原文表記「安布」に拠って記したことによると考えられる（憶良歌の、「逢ふ」を意識しての「阿布」の表記例は、万葉集中にこの一例であり、特殊である）。

原文表記「安布」は万葉集中に当面歌の三九一〇番歌を含め十五首十六例ほどが存する。次のとおり（当面歌は省略する）。原文表記は（ ）に入れて示す。

- ① うつつには逢ふ（安布） よしもなしぬばたまの夜の夢にを継ぎて見えこそ（巻五・八〇七番歌、大伴旅人）
 ② 筑波嶺にかか鳴く鷺の音のみをか泣きわたりなむ逢ふ（安布）とは無しに（巻十四・三三九〇番歌）
 ③ 千曲なに浮き居る舟の漕ぎ出なば逢ふ（安布） ことかたし今日

- にしあらねば(巻十四・三四〇一番歌)
- ④利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふ(安布)のす逢へる君かも(巻十四・三四一三番歌)
- ⑤己が命をおほにな思ひそ庭に立ち笑ますがからに駒に逢ふ(安布)ものを(巻十四・三五三三番歌)
- ⑥別れなばうら悲しけむ我が衣下にを着ませ直に逢ふ(安布)までに(巻十五・三五八四番歌)
- ⑦年において一夜妹に逢ふ(安布)彦星も我にまさりて思ふらめやも(巻十五・三六五七番歌)
- ⑧思ふ故に逢ふ(安布)ものならばしましくも妹が目離れて我居らめやも(巻十五・三七三一一番歌、中臣宅守)
- ⑨遠き山関も越え来ぬ今さらに逢ふ(安布)べきよしのなきがさぶしさ 一には「さびしさ」といふ(巻十五・三七三四番歌、中臣宅守)
- ⑩命あらば逢ふ(安布)こともあらむ我がゆゑにはだな思ひそ命だに経ば(巻十五・三七四五番歌、狭野弟上娘子)
- ⑪白樗の我が下衣失はず持てれ我が背子直に逢ふ(安布)までに(巻十五・三七五一一番歌、狭野弟上娘子)
- ⑫我妹子に逢坂山(安布左可山)を越えて来て泣きつつ居れど逢ふ(安布)よしもなし(巻十五・三七六二番歌、中臣宅守)
- ⑬白樗の我が衣手を取り持ちて齋へ我が背子直に逢ふ(安布)までに(巻十五・三七七八番歌、狭野弟上娘子)
- ⑭……けだしくも逢ふ(安布)ことありやと あしひきのをてもこのもに 鳥網張り 守部を据えて……(巻十七・四〇一一、大伴家持)

①～⑬の例のように「安布」の原文表記は、男女が「逢ふ」意を表す一般的原文表記であり、④の巻十四・三四一三番の「波にあふ(安布)のす」も、比喩表現として「逢へる君かも」を押し立てるのであり、⑤の巻十四・三五三三番歌の「駒に逢ふ(安布)」も、駒に乗って来る思い人に逢ふ意で用いられていて、「安布」が男女が「逢ふ」意を主意とする原文表記であることは動かない。また、「棟」の先掲原文表記の「安布」「相」と「逢」(男女が逢う意の原文表記)の相関関係は、次のような同一表現の原文表記によっても明らかである。

- A 「安布登波奈思爾」(巻十四・三三九〇番歌)
 「相跡羽奈之爾」(巻四・五九二番歌)
 「逢者無」(巻十一・二七二六番歌)
- B 「多大爾安布麻弓爾」(巻十五・三五八四番歌)
 「直相麻氏爾」(巻十二・三〇五六番歌二二)
 「及正逢」(巻十一・二四一三番歌)
- C 「安布余之」(巻五・八〇七番歌)
 「相因」(巻四・七七五番歌)
 「逢因」(巻三・四八三番歌)

松田聡先掲論は、筆者前掲論文の「『棟』に『逢ふ』の意をこめている」という筆者の指摘を肯うも、「『棟』に妻に逢う意が込めら

れている」という見解に対しては、

この贈答で妻に逢うことが問題にされているとは考えがたい。

『釈注』に「棟」(アフチ)なればこそ、それを庭に植えれば、山時鳥が時となくやって来て、いつもいつも逢うことができるという心が潜んでいるのではあるまいか」とあるように、ここは単にホトトギスに「逢ふ」という心で「棟」という希少な歌語を持ち出したものと見るべきではないだろうか。

と述べている。しかし、ほととぎすに「逢ふ」という例は一例もない。先掲①の例に、逃げ失せた鷹獵用の鷹が「ひよつとして見つかることもあるか」という文脈で「逢ふ」が用いられているけれども、このような例を当面歌に適用することはできない。

以上のことから、書持の三九一〇番歌の「棟」(原文「安布知」)には男女が「逢ふ」意、具体的には家持が妻坂上大嬢に逢ふ意が込められていると言える(家持の三九二三番歌の「棟」の原文表記「安不知」については後述)。

そうしてみると、書持の三九一〇番歌の下の句の「山ほととぎす」には擬人的比喩の用法があると見なければならぬ。久邇京の山辺に住む家持を意識し「山ほととぎす」になぞらえているのである。万葉集中に「山ほととぎす」は他に六例(巻八・一四六九番歌、巻十・一九四〇番歌、一九七八番歌、巻十八・四〇五〇番歌、巻十九・四二〇三番歌、四二二〇番歌)。この中には「あしひきの山ほととぎす汝が鳴けば家なる妹し常に偲はゆ」(巻八・一四六九番歌)のような歌もある。書持が三九一〇番歌の「山ほととぎす」に

擬人的比喩の手法を用いた際、「山ほととぎす」を詠む次のような「譬喩歌」を特に考慮したと考えられる。

譬喩歌

橘の花散る里に通ひなば山ほととぎす響もさむかも(巻十・一九七八番歌)

この歌は上三句に仮定条件句、下二句に「山ほととぎす——むかも」を配し、当面の書持歌三九一〇とまったく同じ歌型で語句も共通する。また、「橘の花散る里」に女の家を、「山ほととぎす響もさむかも」に人が騒ぎ立てることが譬えられている。表面的には詠物歌と見えるからか、「雑歌」の部に収められている。けれども、編者はこの歌に寓意を読みとって「譬喩歌」の小題を記したのである。

この歌と同様、書持の三九一〇番歌も、表面上は詠物歌と見える面があるけれども、実質は譬喩の手法をもつ歌なのである。そう捉えてはじめて三九一〇番歌は読み解けるのである。先掲の異論は書持歌が詠物歌と見える面にとどまっている。それでは書持の心と表現の真実には至りつくことはできない。

書持歌は「棟」に妻に「逢ふ」意、具体的には家持の妻坂上大嬢に「逢ふ」意をこめ、「山ほととぎす」に久邇京の家持をよそえ、「離れず来むかも」にいつも逢えることを願う意がこめられていると言える。書持は自身の家持への思いとともに、家持と妻坂上大嬢の二人を思いやって、歌の表現にこのような意をこめて詠んだのである。

松田聡先掲論には、「公務で久邇京にいる家持に対し、『離れず来』ることを求めるような文脈は成り立ちがたいのではないか。」と記しているが、松田はこの文学の本質がわからないのではなからうか。現実にはなかなか逢えないからこそ、いつも逢っていたいという思いがいつそうつよくつのるのである。

久邇京にいた「高丘河内連」という男の創作歌で、久邇京から奈良の家の妻に逢いに行つた時の男の歌と、妻が夫と逢いえたよるこびの中に二人居続けることへの希求をこめた歌が次のように並んで置かれていることを知るべきである。

高丘河内連が歌二首

故郷は遠くもあらず一重山越ゆるがからに思ひぞ我がせし(巻六・一〇三八番歌)
我が背子とふたりし居らば山高み里には月は照らずともよし

(一〇三九番歌)

鉄野昌弘先掲論には、書持歌三九一〇番歌の「山ほととぎす」は、「鈴木氏の言うように、山深い久邇京に住む家持を意識した表現だろう。ただし、それは家持自身と言うよりは、その形代と言うべきではないか。」と言うが、この言葉は書持の三九一〇番歌に答えた家持の第三首三九二三番歌の「ほととぎす棟の枝に行きて居ば」の「ほととぎす」に適用すべき言葉であり、その点についてはすでに筆者先掲論文に、奈良の家に行くことができな「自己の気持ち託したほととぎす」「家持の思いを掛け渡すそのほととぎす」と記している。

注意しなければならぬことは、書持の三九一〇番歌の擬人譬喩的手法の「山ほととぎす」と、これに報えた家持三九二三番歌の形的「ほととぎす」には表現の位相が認められることである。鉄野論文はこのことに思い至っていない。

筆者前掲論文に指摘したように、書持の二首は、父大伴旅人の妻の死を悼んだ山上憶良の「日本挽歌」の反歌第四首七九八番歌と、それに深く有機的にかかわる巻八・一四七二、一四七三番歌(次掲)の手法を十分考慮して詠んだ歌である。

式部大輔石上堅魚朝臣が歌一首

ほととぎす来鳴き響もす卯の花の伴にや来しと問はましものを

(巻八・一四七二番歌)

右は、神亀五年戊辰に、大宰帥大伴卿が妻大伴郎女、病に遇ひて長逝す。その時に、勅使式部大輔石上朝臣堅魚を大宰府に遣はして、喪を弔ひ并せて物を賜ふ。その事すでに畢りて、馱使と府の諸卿大夫等と、ともに記夷の城に登りて望遊する日に、すなはちこの歌を作る。

大宰帥大伴卿が和ふる歌一首

橘の花散る里のほととぎす片恋しつづ鳴く日しぞ多き(巻八・一四七三番歌)

石上堅魚の一四七二番歌は、「卯の花」を大伴旅人の妻大伴郎女に、「ほととぎす」を旅人に見立て、妻を亡くした旅人への同情と

慰撫を込めた歌である。これに和した旅人の一四七三番歌は、「橘の花」に妻を、「ほととぎす」に旅人自身をよそえて亡妻思慕の情を述べている。

書持は「日本挽歌」とともに右の二首を享受していたのである。そして、この二首に用いられている如上の見立てや譬喩の手法をも参照して三九一〇番歌を詠み成したのである。

筆者前掲論文に述べているように、書持の三九〇九番歌の「橘」の花と三九一〇番歌の「棟」の取り合わせも、「日本挽歌」七九八番歌の「棟」と右の巻八・一四七三番歌の「橘の花」という妻への愛とかかわる植物の取り合わせを強く意識したことによると言える。

「橘」の花は、家持と妻坂上大嬢の愛する花の一つであつたことに留意する必要がある。巻八には、結婚前に、家持が坂上大嬢に贈った「大伴家持、橘の花を攀ちて、坂上大嬢に贈る歌一首并せて短歌」(巻八・一五〇七―一五〇九番歌)が収録されており、その長歌一五〇七番歌に、

いかといかと ある我がやどに 百枝さし 生ふる橘 玉に貫
く 五月を近み あえぬがに 花咲きにけり 朝に日に 出で
見るごとに 息の緒に 我が思ふ妹に まそ鏡 清き月夜に
ただ一目 見するまでには 散りこすな ゆめと言ひつつ こ
こたくも 我が守るものを……後略……

と歌い、反歌第一首に

望ぐたち清き月夜に我妹子に見せむと思ひしやどの橘(一五〇八番歌)

と詠んでいるのである。

四、大伴家持の報送歌

家持報送歌三九一―三九二三番歌の序文は、初夏の時候に対する家持の格別な思いに望郷の念が加わることによって引き起こされる「鬱結の緒」を作歌によって散らそうとするばかりであると述べている。

「鬱結」の語は、萬葉集中他に三例。その山上憶良の巻五・八六八―八七〇番歌の序、家持の巻十七・三九七六―三九七七番歌の序、家持の巻十九・四二四八―四二四九番歌の序の例を検討すれば、「鬱結」の語は、心通い合う掛け替えのない人(ここでは、弟書持や妻坂上大嬢)と離れて一人いなければならぬわびしさを反映する語と捉えることができる。

この「鬱結」の語の用法と、前述の書持歌の手法とを考慮すれば、「鬱結の緒」は、書持がいて、家持の妻坂上大嬢が留守をまもっている「奈良の宅」への望郷の思いと深くかわっていることが知られるのである。

家持の第一首三九一一番歌は、書持の二首に対して答えた歌で、久邇京での侘び住まいを象徴する「山辺」に在って、木の間をくぐっては毎日鳴く「ほととぎす」の鳴き声によって、望郷の心を慰

めている旨を詠んでいる。

その「ほととぎす」の鳴き声の永続性を強く希求したのが、第二首三九一二番歌である。この歌は、

我がやどの葛葉日に異に色づきぬ来まさぬ君は何心ぞも（巻十・二二九五番歌）

の例を考慮すると、「ほととぎす何の心ぞ」と非難することで、橘の玉貫く月だけでなく一年中常に鳴いてくれることを願った歌と捉えられる。書持がほととぎすの声をいつも聞いていたいと歌った表面上の意に共鳴した歌である。

この三九一二番歌について、松田聡先掲論には、「橘の玉貫く月」を五月とし、

「ホトトギスといふものは、どういふ心で五月に限って鳴いて声を響かせるのか」といささか観念的に詠んだものではあるまいか。つまり、ここ久迩京では四月の今も鳴いているのに、世間で五月の鳥のように言われているのはどういふことかと、通念に対して疑問を呈しているのである。（傍点は松田自身による）

と記し、

家持は、書持がホトトギスの常住を願って「橘は常花にもが」と歌うのに対して、ホトトギスが鳴くのは何も「橘の玉貫く

月（＝五月）に限ったことではないでしょう、という機転で応じているのである。

という。しかし、この捉え方は書持歌三九〇九番歌とうまくみ合わない。先掲の「何心ぞ」の例や書持歌の「常花にもが」の「常」、「住むと来鳴かば」の「住む」の用法を考慮していないこの捉え方には無理がある。左注に「四月の三日」、歌に「玉貫く月」とある点についても、『全釈』の「統紀によると、天平十三年は閏三月があつたのだから、四月は例年の五月のやうな気節であつたのである。」という事情説明に尽きていると思われる。

松田聡先掲論は「久迩京では四月の今も鳴いているのに、世間で五月の鳥のように言われているのはどういふことか」と、四月、五月という月を問題にしているけれども、書持歌の「常花にもが」の「常」は月の限定を超越する意味を持つ語であり、それを受けての家持歌三九一二番歌は、「橘の玉貫く月」に鳴くほととぎすをせめることによって、月の限定を超越していつも鳴いてほしいという思いを述べた歌なのである。

家持の第三首三九一三番歌は、書持の第二首三九一〇番歌に和した歌で、書持歌と同様、「棟」に妻に「逢ふ」の意を込めている。この家持歌の「棟」の原文表記は「安不知」。三文字で「安きこと知らず」と訓むことができる。これは、万葉集中の

何せむに命をもとな長く欲りせむ生けりとも我が思ふ妹にやす
く逢はななく（巻十一・二三五八番歌）

の第五句六句の原文表記「吾念妹 安不相」や、

夜も寝ず安くもあらず白袴の衣は脱かじ直に逢ふまでに（巻十
二・二八四六番歌）

の第二句「安くもあらず」の原文表記「安不有」などと密接にかかわる表記である。家持は「棟」に書持と同様に妻に「逢ふ」意をこめたけれども、たやすく逢えない現状を嘆いて心安らぐことはない意を「安不知」の表記によって表したものと考えられる。

三九一三番歌の上三句「ほととぎす棟の枝に行きて居ば」は、家持のもとで鳴くほととぎすが、隔てる山を越え、書持や妻坂上大嬢のいる奈良の宅へ飛びゆき、妻に逢うの意のこもる「棟」の枝に留まることを仮定している。書持の三九一〇番歌の「山ほととぎす離れず来むかも」をうけて、自らは奈良の宅に行くことができないうえに、自己の気持ちを託した文芸上のほととぎすを、どうしても奈良の宅に飛び行かせなければ心がおさまらなかつたのである。「ほととぎす棟の枝に行きて居ば」という表現によって、家持の心魂は、弟の書持や妻の坂上大嬢のいる故郷奈良の宅へと回帰しているのである。

家持の心魂を屈けるそのほととぎすが、棟の枝に降り留まった瞬間に枝が揺れ、花が散る様子を美しく思い描いて「行きて居ば花は散らむな玉と見るまで」と詠んでいる。「棟」の散る紫がかった白い花（幻想）をこぼれ落ちる飾り玉（幻想）と見立てた万葉集中唯一の表現で、書持とともに妻坂上大嬢のいる故郷奈良の宅の情景を、憧憬をもって美的に幻想した表現である。光の中を静かに散り

こぼれる棟の花のきらめく幻想は、飾り「玉」のきらめきのようにこよなく美しい。この美しい幻想の景は心の救いとして機能し、家持は鬱結の緒を払ったのである。

ではなぜ美的飾り玉なのか。この問いに対する答えとして、考えられることは二つある。一つめは、後に越中国守であった大伴家持が、留守を守って奈良の大伴氏の家にいる妻坂上大嬢に贈るために、真珠（白珠）を願った次のような歌から知られるように、菖蒲草や橘の花に交えて白玉を緒に通して縋にすることが実際にあったことによると考えられる。

京の家に贈るために、真珠を願ふ歌一首并せて短歌

珠洲の海人の 沖つ御神に い渡りて 潜き取るといふ 鰻
玉 五百箇もがも はしきよし 妻の命の 衣手の 別れし
時よ ぬばたまの 夜床片さり 朝寝髪 掻きも梳らず 出で
て来し 月日数みつ 嘆くらむ 心なぐさに ほととぎす
来鳴く五月の あやめぐさ 花橘に 貫き交へ かづらにせよ
と 包みて遣らむ（巻十八・四一〇一番歌）

白玉を包みて遣らばあやめぐさ花橘にあへも貫くがね（四一〇
二番歌）

（以下三首省略）

二つめとして考えられることは、書持がその第一首三九〇九番歌において、かつて（結婚前に）家持が坂上大嬢に贈った巻三・四〇八番歌を踏まえたように、家持が第三首三九一三番歌に飾り「玉」を詠んだ下地には、かつて家持から坂上大嬢に贈った、または家持

と坂上大嬢で贈答した、次のような「玉」の歌が存在すると思われる。

大伴宿禰家持、同じき坂上家の大嬢に贈る歌一首

朝に見まく欲りするその玉をいかにせばかも手ゆ離れずあらむ (巻三・四〇三番歌)

大伴坂上大嬢、大伴宿禰家持に贈る歌三首 (その内の第一首)

玉ならば手にも巻かむをうつせみの世の人なれば手に巻きかたし (巻四・七二九番歌)

また、大伴宿禰家持が和ふる歌三首 (その第三首)

我が思ひかくてあらずは玉にもがまことも妹が手に巻かれなむ (巻四・七三四番歌)

家持の巻三・四〇三番歌は、書持が三九〇九番歌を詠み成す際に踏まえた前掲巻三・四〇八番歌の五首前に位置する歌である。第五句に書持の三九一〇番歌と同様に「離れず」を用いている。書持はこの四〇三番歌もむろん心得ていたであろう。この四〇三番歌を踏まえて、坂上大嬢と家持の贈答歌が展開している。右の三首は、家持と坂上大嬢が互いを「玉」に譬え、いつも一緒にいたい思いを詠んでいるのである。

家持と坂上大嬢のかつての思い出の「玉」の歌々を想起させる三九一三番歌の美しい幻想の「玉」の歌が、久邇京と奈良の宅とに離

れ離れにある家持と坂上大嬢の逢いたいという思いを強く結びつけるのである。

(二〇一六年 平成二十八) 年十月二日)

(注)

1、山梨英和短期大学「紀要」第二二号

2、「萬葉」一六三三号。同様な詠物詩の観点に拠るものに、花井しおり「橘」と「あふち」(奈良女子大学文学部「研究年報」第47号、二〇〇三 平成十五) 年十二月発行) がある。

3、「萬葉」二百二十二号

4、鈴木武晴「大伴家持・坂上大嬢と藤原郎女」、美夫君志第四十七号、一九九三 平成五) 年十一月発行

5、このことは、家持が四〇八番歌を書持にも見せ、語ったことを告げる。家持が坂上大嬢と結婚する前から、家持は書持に坂上大嬢のことを話し、家持が坂上大嬢に贈った歌についても、書持に語っていたことを示している。家持にとつて書持は、歌文芸についても率直に語り合い、高め合うことのできる弟であったと見られる。

6、同様の例として、「近江」の「あふ」に「逢ふ」をかけた、

我妹子にまたも近江(原文「相海」)の安の川安寐も寝ずに恋ひわたるかも(巻十二・三二五七番歌)

や、次の歌がある。

あをによし 奈良山過ぎて もののふの 宇治川渡り
 娘子らに 逢坂山に 手向けくさ 幣取り置きて 我妹子
 に 近江(原文「相海」)の海の 沖つ波 来寄る浜辺を
 くれくれと ひとりぞ我が来る 妹が目を欲り(巻十
 三・三三三七番歌)

この歌には「娘子らに逢坂山(原文「相坂山」)の例も見られる。「我妹子に逢坂山」(原文「和伎毛故尔 安布左可山」)の例は、後掲の巻十五・三七六二番歌に存在する。

以上のような用法を書持は心得ていて、「棟」の「あふ」に「逢ふ」の意をこめたと考えられる。

7、松田聡論文が査読誌に掲載されたことは、はなはだ疑問である。その疑問は査読担当編集委員の読みの問題にまで及ぶ。担当編集委員は査読の際に松田引用の二十八年前の筆者前掲論文を読んで確認していないと思われる。

8、鈴木武晴『テーマ別万葉集』第八章「万葉の兄弟」、おうふう、二〇〇一(平成十三)年二月、二一四頁

(補考)

家持は越中国守として赴任していた天平十八(七四六)年の秋に、弟書持を亡くした。そして、「長逝せる弟を哀傷しふる歌」(巻十七・三九五七〜三九五九番歌)を作った。その短歌三九五九番歌は、

かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波も見せましものを
 という。この歌は、書持が家持との贈報歌群の三九一〇番歌を成す際に考慮した山上憶良の「日本挽歌」の第四首七九八番歌の直前に存する第三首七九七番歌の

悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごとく見せましものを

を踏まえての詠で、当面の贈報歌群の歌に込められた書持の家持とその妻坂上大嬢への思いやりに寄り添う挽歌となっていることを指摘しておきたい。

受領日 二〇一六年十月五日

受理日 二〇一六年十一月九日